

企業と大学の関わり方の考察

(株) ベネッセコーポレーション 木谷 紀子、大内 学

kitani@mail.benesse.co.jp, gaku@mail.benesse.co.jp

1.はじめに

大学と企業の関わり方には、大学の研究室との共同研究や受託研究、研究員受け入れ制度、昨今では、就職後の企業と学生とのミスマッチを少なくする為の就業体験であるインターンシップなどが主なものとして挙げられる。

しかし、共同研究やインターンシップは、非常に有効である反面、様々な手続き等が発生し、大学側にも企業側にも負担が大きいという欠点も存在する。

共同研究開発まで行かなくとも、大学と企業がもっと自由に、より負担の少ない形式で関わる場が与えられる事が望ましく思う。

また、それぞれが違った立場で、1つのテーマについてある程度継続的にディスカッション出来る場が別に存在する事がより大学・企業双方にとって有効ではないかと考える。

上記に挙げた問題への1つの解決方法として2005年度、東洋英和女学院大学の塚本榮一教授、塚本ゼミの学生(3年生)と(株)ベネッセコーポレーション(東京都多摩市)が共同で取り組んだ実践例について述べる。

2.実践の概要

今回、ゼミの研究対象として(株)ベネッセコーポレーションの中学生向け電子端末教材「ポケットチャレンジV2」(略称:ポケチャレURL:<http://pc.benesse.co.jp/>)を題材として取り扱い、実践を行った。

東洋英和女学院大学の塚本榮一ゼミ(http://www.toyoeiwa.ac.jp/daigaku/newtop/gaku_gakka/semi/tukamoto.html)は、人間がどのように情報を処理しているかを探求し、人に優しいデザインあるいは効果的な学習方法など私たちの生活に身近な情報活用と改善について役立つ情報科学を主に研究している。

今回の研究テーマは、「ポケチャレ式効果的学習方法」と題し、企業が扱う商品を分析し、中学生を対象とした商品を大学生を対象に変えた時にどんな特徴・機能があれば良いかという事を扱った。

研究の具体的な内容を以下に示す。

(1)製品の分析・紹介

取り扱い説明書や製品のホームページからの情報及び製品を実際に使った分析

- (2)製品を使って学習をより効果的に行う方法の考察
学習意欲と関連付けての製品分析
- (3)製品を人間科学的に分析
- (4)大学生版への応用案の提案

上記のサブテーマ1つにつき、3~4名程度のグループで調査・研究・発表を行なっていくという形式で行われた。

3.実践の詳細

実施スケジュールを以下に示す。

5月 研究テーマの決定、商品を使った学習法の分析

10月 塚本教授及びゼミの学生代表との対面ディスカッション

取り上げるテーマについて、意見交換を実施。

10月~11月 e-mailを通じてのディスカッション

テーマ及び企画の内容、学園祭での発表内容に関して、e-mailを通じて以下のサイクルを繰り返して意見交換を実施。(往復6~7回)

- ◆ 学生からの提案、企画内容のe-mailでの送信。
- ◆ 企業担当者内での意見打ち合わせ、企業担当者からの打ち合わせ内容の返信
- ◆ 企業担当者からの返信内容に関してゼミの時間にディスカッション
- ◆ ゼミの時間に話し合った内容をまとめた結果を企業担当者にe-mailで送信

11月 学園祭での研究成果発表

数ヶ月にわたって調査・研究してきた内容を学園祭で掲示発表。学園祭の訪問者にアンケート調査。企業担当者も学園祭に訪問。

12月 企業担当者を前にしての最終研究成果発表会

学園祭で得られたアンケート内容や掲示発表を見た人からの意見を研究内容に反映。さらに深めた内容で企業を訪問して、企業担当者の前で成果発表。

e-mailを通じてのやりとりでは、微妙なニュアンスがうまく伝わらず、途中もどかしい思いをしたり、ゼミ生達の企画の目的が定まらず「何が目的なのか分からない」状態になったりする事もあったが、何回かの繰り返しのやりとりで、相互の意志疎通もスムーズにいくようになり、また企業担当者のアドバイスにより、企画の方向性

が見えてくるということもあった。企業側の担当者からの意見の中心は、企画の対象者を明確にすること、企画実施にあたっての問題点・課題点を明確にすること、収益的な観点を入れるという学生に視点として不足しがちな点であった。

やりとりする企画書が更新されて行く度に、その内容から、ゼミでの積極的なディスカッション、真面目に真剣に取り組む姿勢が垣間見られた。

また、最終研究成果発表会での内容は、学園祭から約1ヵ月程度の期間であったが、学園祭でのアンケート結果や得る事が出来た意見が十分に反映されたものとなっていた。最終研究成果発表会では、次年度に塚本ゼミで研究をする予定の2年生も数名参加し、先輩の成果発表の様子を見学した。

4.実践を終えての結果

12月の最終研究成果発表会を終了後、塚本ゼミ生の方々から頂いた意見をいくつか（一部抜粋）紹介する。

- ◆ 社会に出る時に向けて、足りない部分をプラスしていき、感受性を養っていきたいと思います。
- ◆ 「自分達だけの熱い思いが、他の場でどのように受け取られるのか」という事を本当に考えさせられたという事がありました。
- ◆ 社員の方を前にし、発表することにより、学園祭とは違う緊張感、そして自分自身の説明力のなさを実感しました。反省点も沢山あり、私自身の改善点を発見できた良いきっかけとなりました。
- ◆ 実際に企業の方とお話する事で学生である私達にはなかった新しい視点というものを知ることができました。
- ◆ 就職活動のアドバイスまでしていただきましてありがとうございました。
- ◆ 実際に企業を訪問し、担当者の方のお話を聞くことができたので、とても貴重な体験になりました。

上記の意見と最終研究成果発表会に出席した社員からの意見をまとめ、実践を終えての双方のメリットを以下に整理する。

企業側のメリット

- ・大学生からの質問や新たな提案を受けることで商品の企画に対しての新しい視点の発見が得られた。
- ・教材の対象者でもなく、またその保護者でもない世

代が持つ新しい視点からの商品分析によって商品の特徴を改めて認識することが出来た。

大学生側のメリット

- ・資料のまとめ能力、プレゼン技法、社会ルールをマスターする1つの場が与えられた。
- ・就職活動への不安の解消、企業担当者と話すことで就職活動の場とは全く違った場での情報収集が出来た。
- ・将来何をしたいかを明確にする為の1つの手段を得る場が与えられた。

大学生からの意見及び企業担当者の意見何れも、異なる視点（立場）からの気づきが得られたという点を中心である事が分かった。社会人にとって、大学生と1つのテーマに関してディスカッションするという事はなかなか難しいが、今回双方に取ってメリットがある形でこの実践を行う事が出来たと考える。

5.おわりに

就職活動や将来の進路に悩む学生は多いが、e-mailと対面でのやり取りを組み合わせた企業と学生の相互にメリットがあるこの取り組みが、企業と大学の関わり方、大学生の学びの場の1つとして有効ではないかと考える。

今後は折角芽生えた取り組みの種を今年度だけで終わらせるのではなく、継続的に育てて行く必要があると考える。

また、何回か実践を行う事で、双方にとって一番負担が少なく、最大限の効果を生み出す仕組みを考える必要がある。必要であるならば、取り組みをサポートするツールなどの開発を進めて行きたい。

謝辞：

この実践にあたって、多大なるご尽力を頂いた東洋英和女学院大学の塚本先生、ゼミ生の皆様、最終研究成果発表会で有用な意見を頂戴した（株）ベネッセコーポレーションの田尾氏、埴田氏、篠原氏、宮原氏に、心より感謝申し上げます。

参考文献：

- 1.小川博、他：“インターネットによるインターンシップ”、CIEC 会誌 コンピュータ & エデュケーション Vol.15,2003,pp.64-70
2. 玉川大学出版部 (2003/10)：“キャンパスライフの今”